

現代社会を『関係性』という観点から考える

②③ 自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦 恵子

連載 14 では『「開く」ことと「閉じる」こと』について書かせていただきました。

その後、連載 15 では『つながりが支えるところ』と題して、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となり社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継いで、『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えてきました。それを受けて連載 17 では、これまで述べてきたことを踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えるというタイトルで、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、「地域社会」で生きるということ、について考えてきたともいえます。また、現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあります。例えば家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。これに関しては連載 19 で「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということというタイトルで問題提起をさせていただきました。連載 19 回では「自分は誰かとつながっている」という感覚を持つために私が必要だと痛感している『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、連載 20 では、『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽というタイトルで、コロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について、連載 21 では、Society から Home へ矮小化していく社会について述べさせていただきました。

連載も 5 年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も、自身の専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだこと、触発されたことをこの連載原稿に落とし込んでいきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」についてというテーマで、現在議論されている地域包括ケアシステムの在り方について私論を述べました。

連載 24 回となる今回は、自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさというタイトルで、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、

「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながるなどについて、私見を述べさせていただきます。

連載原稿として一定の一貫性は保持したいと考えており（現代社会における関係性に関する考察という観点を大切にすることが主目的）に冒頭で振り返りが必要と考えており、連載 14 以降、これまでの連載をまとめる短い文章を記載していることを御了解ください。

1 「知っている」ことは実は世界のごくわずかに過ぎないということ

知識として単に「知っている」「聞いたことがある」というレベルではなく、自分自身が主体的にその事象に関わっていくなど体験を通し、より「深く理解している」物事というものは、いったいどのぐらいなのでしょう。

個々の人間がそのために費やすことのできる時間、「深く理解する」「それを記憶する」ことに要するワーキングメモリーともいえるべき部分にもおそらくは制限もあるであろう（脳科学に関しては素人なのでこうした表現が正しいかわからないのですが）ことを考えると、「知っている」ことは実は世界のごくわずかに過ぎないということについて、私達人間はより自覚的である必要があり、それが社会で生きていくうえでの謙虚さや他者への気遣い、社会課題への積極的関心につながっていくのではないかと考えています。

それならば、「知っている」ことは実は世界のごくわずかに過ぎないと自覚することによって、初めて自発的に「より深くこの世界を知ろう」という動機付けがなされるのであらうと思われまじし、何よりも「自分に知らない世界がある」ということを「知っている」（自分の無知を知っている）ことは、例えば「自分の知らないことを知っている人」と話し合う際に、相手のことを尊重することにつながると考えています。

援助専門職の分野でも、昨今とみに専門分化・多様化が進展していく傾向が強くなりつつあると感じられる場面もあり、ならば一層この点について自覚的であることが、いわゆる「知らないがために適切な支援ができない」「他機関（多機関）と有機的な連携ができない」と理由で、支援を必要としている人にとって不利益な事態を招きかねないと考えています。

もちろん、人間は神様のように万能でもないので、全てのことを自らの体験に落とし込みその本質を深く知り得るということは、まずなし得ないでしょう。少なくとも私の場合は到底難しいと考えます。それならば、「知らないこと」に直面した際、自身が「知らない」ことを必死で隠そうとしたり、「知らない」ことを指摘された時に体面を潰されたと感じたり、「自分の知らないことを知っている人」に対して、マイナスの感情（嫉妬など）を向けたりするのではなく、その時点で「知らないことについて、体験と理論の双方で理解している現場の方に教えていただく」ということが大切ではないでしょうか。

2 「相手と自分との違い」を認め合わないことが、争いや円滑な連携阻害のもとになる

小は対一の人間関係から大は国際紛争に至るまで、解決の糸口がつかめない原因というのは、実は標記にあるのではないかと、改めて考えさせられる機会が、私自身にもあります。

私が従事する刑事政策、なかでも更生保護に関する業務は、もともとは民間篤志家

の善意の活動に端を発し、保護司や更生保護女性会等多くの更生保護ボランティアの方に支えていただいているものでもあります。何より、非行や犯罪を行った人で立ち直りを真剣に考えている人々の社会復帰に際しては、地域の方々の理解と協力が不可欠です。私自身、こうした啓発広報のため、地域社会や大学・大学院等、職能団体などで様々な講義やゼミなどを担当してきました。

しかし、その一方で、事件発生当時は大きく報道され、被疑者逮捕時や被告人の裁判時にも新聞その他の紙面を賑わす事件であっても、加害者や被害者の「その後」を知る機会はけっして多いとはいえません。特に少年院に出向した折には、少年矯正を含む矯正分野については、漫画や小説等のフィクションにおいて事実と異なるデフォルメが目立ち、それに触れた方々から様々な誤解に直面しました。

更生保護については、矯正の分野に比べて配置されている国家公務員の数も少なく、全国の官署の数も少ないため、広報（ただ知ってもらうだけではなく、理解者や協力者を増やしていくという Community Relations）必要性を痛感する場面も多々ありました。

個人的なことになりますが、私が社会福祉士や精神保健福祉士の資格を取得し専門職として活動していることの理由の1つとして、更生保護を含む刑事政策全般について福祉の世界で働く方々に正しく知っていただきたいと考えていること、そして、法務省の施策とは異なり、都道府県独自の施策展開がなされていくことも少なく福祉行政について、私自身も積極的に学びたいと考えたことです。

職能団体では専門委員会に所属し定期的な例会に参加し、そこで討議に参加したり、每期違ったテーマで講師を招いて勉強会を行っています。そのたび実感するのは、対人援助職というものは、個々の経験は自分の中で大切に蓄積していく一方、知識を貯金のように考えて「貯金」だけで仕事をすることはできず、常に貪欲に自分の専門領域や隣接他療育の動向を知る、できれば実際に働いている方かその体験を聞き理解に努めることが必要であるということです。

私は周囲の御理解もあり、双方の国家資格で職能団体において「認定」という専門性の証明を得ることができましたが、これはただ専門性の証というだけではなく、生涯にわたって学び続けることを自らに課すものでもあると考えています。「認定」更新申請の時期に仕事や家庭の様々な事情が重なると非常に繁忙になるため、単に国家試験に合格をするだけではなく、「認定」を得てからの日々がより学びという意味ではシビアだと実感しましたが、自分が得た知識や資格に甘んじるのではなく、「学び続ける」という行為のその中にこそ、社会をより深く知りそして考えるという機会も当然ながら少なからず含まれていると感じます。「知らないこと」の存在を知り、「資格があるから」という慢心を排して謙虚に対人援助の仕事に向かい合うことを常に心がけています。

刑事政策の業務に携わっていると、「怖くないの？」という質問もよく受けます。特に大きな事件が発生すると、刑法犯認知件数も刑務所の新規受刑者などもピーク時代の平成半ばに比べて大きく減少しているにも関わらず、いわゆる「体感治安」が悪化するのか、そういった質問が出ることもあります。「無知と無縁は人を歪ませる」という言葉は北九州で NPO 法人「抱撲」を運営されている奥田仁志氏が多くの論文等で強調されている言葉ですが、我々更生保護行政に携わっている者も積極的に大学や地域において、更生保護出張講座等の形で、刑事政策の流れ、更生保護の役割を知っていた

だくように努めています。実際にこうした機会を契機に、更生保護の仕事について更に理解を深め、更生保護の職域で働いてみたいという人もいます。

しかしその一方で、「私ならとてもできないわ」「なんでわざわざこんな仕事についたの」と言われることも経験しました。初対面でいきなりそうした質問をされる方は、おそらく何らかの生きづらさも感じておられるのだらうと思いつつ、「御自身が怖いと思っておられることも、嫌だと思っておられることも、それに敢えて従事する人々がいてこの社会は回っていますし、貴女自身の安全も保たれているのではないのでしょうか」と私がにこやかに～自分ではそのつもりでしたが～お返した言葉で彼女の表情がみるみるこわばるのが分かりました。この後、彼女の御主人から笑いを含んだ声で「さぞ驚かれたころでしょう。」と電話がかかってきました。「あなたと同じ年齢でも社会経験が少ないためか、つい思ったことを言うてしまうのです。」と「お詫び」をされたのです。私は、「怖いと思われるのも当然でしょうし、こうした言葉をお伝えすることも正直躊躇われましたが、お子さんもおられる場で、親御さんがこうした発言をなさることはいかがかと思われましたので。当方こそ失礼いたしました。」と(電話に向かって)頭を下げました。「社会経験が少ない」という一言で話を丸めるのもどうかなあと思いつつ、その場は収まりましたが、その後のおつきあいの場面でも、なかなか難しいなど感じる事が重なりました。「自分の知らないことには関心を持たない」ことは、援助専門職として生きていくという境遇になくとも、自らの生きる世界を狭め、相手も自分も社会的に(年齢相応の役割を)要求される役割を果たせなくしんどくなることも多いのだとその後実感することになるのです。

多様性という言葉が昨今多く用いられていますが、相手との違いを認め合うこと、厳しいご時世だからこそ利他の気持ちを持つことが、今の時代を生きていくための鍵になるとも昨今考えています。

3 援助専門職の「資格」を、チームでの支援に役立てるために

社会福祉士、精神保健福祉士等は、様々な分野に配置されています。特に、精神保健福祉士については精神科病院等よりも行政機関における配置の割合が増え、長年馴染んだ PSW (Psychiatric Social worker) という英語表記も、令和3年4月からは MHSW (Mental Health Social Worker) に変更されました。更生保護においても、医療観察制度の導入に伴い、PSW (現 MHSW) の有資格者で一定の実務経験を要する方が社会復帰調整官として多く更生保護の業界に職員として入職され(それ以外も社会福祉士、看護師・保健師、臨床心理士(公認心理士)、作業療法士等の有資格者で一定の実務経験を有している方もおられます)、私自身も PSW (PHSW) の仕事ぶり(特に地域の諸機関との連携)に大きな刺激を受けたものです。結果的に30代で精神保健福祉士養成課程通信課程(短期)で学ぶことになりましたが、実務経験30年近い方、セカンド・キャリアとして学びを深める方々も参加されており、資格取得のための学習だけでは得られない経験に基づく知恵の多彩さに、多くの刺激を受けたものでした。

当時はまだ保護観察官経験者でも実習に参加することが必要でしたので、仕事を前倒しに片付けて年次休暇を取得して実習に参加しました。受入れていただいた事業所さん(就労継続支援B型)は、実習生の受入れにあたって、実務経験が長い社会人の受入れを希望されており、若いスタッフの方と実習生とが、様々な場面で真剣に協議することもありました。私は実務経験が自分より更に長い男性のとペアで実習

で参加しましたが、利用者さん同士のトラブルにさりげなく介入してごく自然に納めたり、利用者さんを尊重しながらふるまう彼の姿に、多くの学びを得たと思っています。こうしたこともあり、資格取得後、職能団体が企画する、自分の業務とは取って異なる職域で実習をする機会に参加することに手を挙げました。これまで業務として知っていた「精神科デイケア」等の現場に身を置くことや、そこで聞く当事者やスタッフの方の話は、ケア会議や協議会とは当然異なり、より具体的で本音を聞くことができました。私自身はこの実習を通して、「(知識として) 知っている」ことが「(ささやかだが) 体験として腑に落ちる」とは差異があることを実感しました

ただ、その一方で、「資格」の有無が、チーム支援の円滑さを欠いてしまっているのではないかという場面にも遭遇しました。たとえば、専門職と地域の民間ボランティアが同じ支援チームで動く場面も少なくありません。しかし、専門職の、これもごく一部の方ではあると私は思いたいのですが、地域の民間ボランティアの方々について、「地域の普通のおっちゃん、おばちゃん」「資格も持っていないから専門性がない」と研修会の場で公言され、これに対し、「まさしく私なんて地域のおばちゃんですわね」と、地域で知らない人はない先駆的な事業を行っている事業の立ち上げ人として活躍されている方が応じられるという場面に出会ったこともあります。

社会福祉士等は、あくまで業務独占ではなく名称独占の資格です。たとえ資格を持っていなくても、その地域社会に生活者として根を下ろし(ここで様々な役割を担い絶大な信頼を獲得されている方も少なくありません。生活者として地域社会で生きる中で得た経験や智恵も、単なる資格のための勉強などでは到底得られないものです)、地域の社会資源に通じ豊かな人脈を生かし、経験の浅い、あるいは異動してきたばかりで地域性について疎い専門職より、当事者の支援や地域課題の解決を成し遂げる活動を展開されることもあります。

本誌編集長が「木陰の物語」で述べられたように、今は「資格社会」です。一方、社会福祉士や精神保健福祉士についても、資格取得がゴールとなってしまう、実務経験がないままいきなり専門職を名乗り資格を持たない援助職との差別化を自ら図ろうとする方もおられます。また、いわゆる「独り職場」への配置もありえます。一方で、学びを得る場としての職能団体への加入率は社会福祉士・精神保健福祉士ともに決して高くはありません。

資格取得は単なるスタートに過ぎないと私は考えています。また、実際の社会資源を知り、多機関連携などを学ぶということについては、やはり実務をこつこつ積み上げていくことに勝るものはありません。特に、当該分野での実務経験がない方については、しかるべき指導員のもとで実際の現場連携を重ねるような仕組みが必要ではないでしょうか。

3 「専門職としてのプライドに賭けて」

ある時私は、精神障害を持つ方の地域移行に関する業務にチームを組んで業務をすることになりました。私自身が全体のコーディネートをしながら、地域の各事業者や担当者が業務を分担しつつ移行のタイミングを図ることになりました。諸般の事情があり、対象者が現在居住している施設は閉鎖までの期間が迫っているなかで、グループホーム入居に関する調整を担うスタッフが一番の重責を負っていました。彼女は私よりも年上で実務経験も長いベテランでした。

しかしこのケースの地域移行は、グループホームの入居時期が再三変更され、チームメンバーから確認されるたびに、担当である彼女からは「多分●●頃」という感じで、ケア会議のたびに入居時期の延期が報告されることが重なりました。

この方は持ち前の明るさで、当事者の方との距離を縮め、物事が支障なく進んでいる時にはまさに弾むように仕事ができる方でした。しかし、その一方で、「見込み」「期待」で発言される傾向があり、この時も、緻密な調整・確認よりも、見込みで期日を報告してしまうことが一度ならず続きました。しびれを切らした別のメンバーから、「そうおっしゃる根拠は？」と確認され、そこで彼女が述べたのが上記の言葉でした。

専門職としての自負に賭けざるを得ない決断というのは確かにあると思いますし、春日武彦先生の「初めての精神科」（第2版）でも、施設入所を拒否した高齢者女性を、「このままでは死んでしまう」という判断で入所させ、結果的には当該女性は施設内であたたかな暮らしをされて亡くなったというエピソードにこの言葉が添えられています。

ただ、こうした事務手続的な瑕疵を指摘されて、それを標記のような言葉で返すことは、瑕疵を指摘した方や支援チームへの明確な回答にはなり得ません。結果的に、グループホームに新たに防災設備の設置をする必要がありそれには時間を要するし見込みが立ちづらいということも判明し、結果的に、当事者の方の治療が断続的で成人期を前に服薬などの再確認も要するというところで、現在入所しているところから帰る場所はいくまで当該グループホームとしながらも、施設退所後は服薬調整も兼ねていったん入院し、グループホームについては見学・外泊などのプロセスを経て施設移行を行うこととなりました。結果的には、服薬調整などもでき、かつ、入院による多角的なアセスメントにより治療方針や退院後の生活設計などもより具体化しました。彼女ができない事情を正直に述べて、そこで皆が考えて次善の策を練るという体験をしたことで、彼女自身も自分の「矜持」について、考え直すきっかけになったということをお聞きします。

4 自分が「知っている」だけの世界生きることの危うさ

結論から申せば、資格や国家試験に合格しただけでできる仕事など、殆どないのではないのでしょうか。ましてや対人援助の業務に長く携わっていると、生活者としての地に足のついた社会経験など自分の生き様が問われるような心持ちになることがあります。制度等を緻密に知っていることも無論必要ですが、それをどのように活用していくのか、場合によっては自分の職域を御存じない分野との連携、自分が相手の職域を御存じない分野との連携もあり得ますので、自分が「知っている世界」に閉じこもらず、経験だけに甘んじず、自分の経験と知識をブラッシュアップしながら支援の質を高めていくことが重要であると考えています。